

第65回公開シンポジウム

情動知能が子どもを伸ばす

◆ プレゼンター

松 村 京 子

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科教授 / 小児発達科学

◆ パネリスト

原 田 亮

甲南女子大学総合子ども学科教授 / 国語教育

◆ 司

会

一 色 伸 夫

甲南女子大学総合子ども学科教授 / 子どもメディア学

一色：それでは、第65回子ども学公開シンポジウムを始めます。本日は「情動知能が子どもを伸ばす」というテーマで、お二人の先生からいろいろなお話をさせていただこうと思います。情動知能は、聞き馴れない言葉かもしれませんが。相手の情動、感情に気づいて、一緒に喜んだり悲しんだりする、自分の情動を調整して、静めたり、楽しくしたりできる、自分の情動を相手に伝えて、自分を理解し、受容してもらう。このような能力を情動知能と言っています。情動知能は人の人生をとて楽しいものにしてくれるということで、子どもたちの情動知能をいかにして育んでいけるのかについて、考えていきたいと思っています。今日は、プレゼンターとして兵庫教育大学の松村先生に来ていただいています。それから、パネリストとして本学の総合子ども学科の原田先生に参加をしていただいております。

松村先生のご略歴を簡単に申し上げます。先生は、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科教授で、ご専門は、小児発達科学です。大阪大学大学院で、医学博士を取得されて、その後滋賀大学教育学部で教壇に立たれました。それから、ドイツのマックスプランク研究所研究員を経て、2004年に兵庫教育大学教授になりました。研究領域としては、子どもの情動、社会性発達に関する研究や、情動知能の育成に関する研究、脳科学と教育に関する研究をJSTで行っています。では、松村先生にお話を伺います。

松村：皆さん、こんにちは。今日は、お招きいただきありがとうございます。本日、お話しするのは、「情動知能が子どもを伸ばす」という内容です。最初に、情動という言葉は、一般的には、聞くことがない言葉だと思います。感情というと皆さんよくわかるのではないのでしょうか。感情が少し強くなったものを情動だと思っていただいたらよいかと思います。研究者の間では、感情という言葉あまり使わなくて、情動という言葉を使います。これは、後でお話しますが、情動なら測定できるからです。それから2つ目のお話としては、情動知能についてお話します。そして、第3として、なぜ、情動知能を育む必要があるのかということについてです。では、情動知能が育まれるのに適した時期があるのか、そして最

後にどのように育まれるのかという内容でお話をさせていただきます。

まず、情動とは、ここに情動が喚起される、湧き起こってくるプロセスを示しております(図1)。まず、外部の環境のテーマと体内の変化、感覚刺激によって、情動が起こってきます。刺激としては、非常にシンプルです。私たちは、外部環境の変化を五感として受容するわけです。だから、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚など、そういった外部環境の変化は、私たちの感覚器で身体の中に入ってくるわけです。その中でも特に、人間にとって大きな刺激は、視覚と聴覚です。見たり、聞いたりすることは、大きく情動を変化させます。そのような外部環境の変化によって、情動が湧き起こってくるのです。もう一つ、体内環境も忘れてはいけません。体内環境の変化がどのように影響するのか。例えば、これは、皆さんよく覚えておいていただくと、社会に出て役に立つと思います。お昼前のお腹のすいている状態で、いろいろな仕事を頼まれたらどうですか。ちょっとムカッとしませんか。ところが、昼食を食べて、ゆったりした後で「これをやってください」と頼まれたら、ムカッとはしません。そのように、身体の中の状況によって、同じ刺激が与えられても、情動が喚起されるかどうか違ってきます。それは、空腹の状態もあるし、睡眠の状態もあるし、疲労の程度もあるかと思います。そのような身体の中の環境によっても、情動が喚起されるかどうか変わってくるということです。そういった外部環境、内部環境の変化によって、刺激が身体の中に入るわけです。身体の中に入って、情動が喚起されるかどうかは、どこで判断されるかというと、脳で判断されるわけです。それは生物学的価値判断と言っています。刺激が入ってきても情動変化が起こらない場合もあります。体内の状態と外からの刺激の強さによって情動が起こってくるかどうかが決まります。楽しく感じるか、悲しく感じるかが、脳で判断されて、嬉しいとか悲しいといった情動が起こるわけです。情動の喚起は、記憶も問題になってきます。例えば、ある時、とても悲惨な交通事故を目撃したとします。人が亡くなる、或いは、大怪我をして多量の出血をしている場面を目の当たりにしたとします。その時に、車のクラクションが喧しく鳴っていた。そういう体験、記憶があると、そのクラクションを聞いただけで震えが出てきたりするわけです。恐ろしいという情動が突然、喚起されるのです。情動喚起には記憶が関係します。外部環境、体内環境の変化で身体の中にそのような刺激が入ってきて、その中に昔の記憶と記憶が絡んできて、情動が起こってくるということです。

情動そのものは、情動体験と呼びます。情動体験そのものを、私たちは、見ることはできません。相手がどのような情動体験をしているのかを正確に読み取ることはできません。しかし、喚起された情動体験は、表出されます。それを情動表出と言います。私たちは、この情動表出されたものを手がかりとして、相手の情動体験の変化を読み取っているわけです。その能力は人との関係を築くのにとっても重要です。

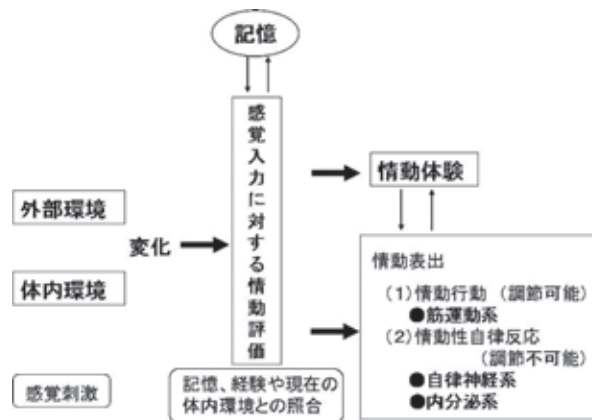


図1 情動喚起のプロセス

さて、その情動表出には、大きく分けると情動行動と情動性の自律反応というのがあります。私たちは普段、相手の情動変化を、行動、表情、言葉で読み取ります。乳児は言葉を発しませんが、幼児はいろいろな言葉を発します。それは、コントロールしない感じたまの言葉を出してくれるわけですから、とても分かり易い。幼児の子どもの情動状態というのは、非常に読み取り易いわけです。幼児の情動は言葉、表情、行動に出てくるわけです。ところが、小学校に入って低学年、中学年、高学年となってきた、思春期に近づいてくると、子どもたちは、ストレートに情動を表出してくれません。楽しいと思っても、顔に出さない。楽しさを表情に出さないで、ポーカーフェイスを作ったりするようになる。また、悲しいと思っても、悲しい顔をしない。それは、大人にもあります。本当はつらくても、「大丈夫」とにこやかな表情で応えたりする。そのような情動行動は、調節できるわけです。調節可能だというのは、良い面とやっかいな面があります。相手の情動を言葉のまま、行動のまま捉えて良いかどうかということです。非常に神経質で、あの人はそのように言っているけれど、実は本音はそうではないなど、いろいろと詮索してしまったりする。そんな気質を持っている人たちは、苦しいのです。そのような問題があるわけですが、情動行動は調節が可能なのものであるということです。

一方、調節できなくて、なかなか表面では見えないものとして、情動性の自律反応があります。自律神経系、内分泌系などです。例えば、非常に緊張すると、心臓がドキドキしてきて、手に汗をかいて、手のひらが湿ってくることがあります。手のひらと足の裏の汗は、他の部位の汗とは違っていて特殊です。精神的なストレスや、心の変動があった時にだけ、汗がでる精神性の発汗です。この仕組みを利用した嘘発見器と呼ばれるものが警察で使われています。情動喚起にともなって、心拍数の変化とか精神性発汗などの自律神経系の反応が起きるのです。

もう一つ、内分泌系、ホルモンの変化があります。ホルモンの変化も目には見えません。腎臓の臓器の上にそら豆ぐらいの大きさの副腎があるのですが、その副腎でストレスホルモンと言われているコルチゾールが分泌されます。今、それを唾液から測定することができるようになっています。その副腎皮質から出るコルチゾールが分泌されて、血液に取り込まれて、全身をめぐり、唾液腺まできて、唾液に出てきます。副腎皮質の分泌から約20分遅れて唾液に出ると言われています。その唾液を採取して、

微量に定量する方法が開発されているので、唾液からストレスホルモンの分泌を調べることができます。ですから、表情や行動などの変化はなくても、自律性の反応を測定することによって、人の情動の喚起を知ることができるのです。

これは、赤ちゃんが泣いているビデオを見たときの学生さんの顔の表面温度の変化です。サーモグラフィという機械で測ります。そのサーモグラフィで、赤ちゃんが泣いている時と泣いていない時をずっとモニターしています。ちょうどこの鼻のところの温度を見てもらったら分かり易いと思いますが、赤い程温度が高く、青い程温度は低くなっています。2分間の映像を見せていますが、赤ちゃんが泣いている時だけ温度が下がっているのがわかります。赤ちゃんが泣いていない状態では、この温度がまた元に戻っている。泣いている時に鼻の皮膚の温度が下がっているということです。なぜ、ここの温度が下がったか。これは、血管が収縮したのです。なぜ、血管が収縮したのか。赤ちゃんが泣いているのを見て、交感神経系の活動が高まったということが言えるのです。緊張状態とか興奮状態にある時に、交感神経系の活動が高まるわけです。それによって、血管が収縮したのです。このようなことが瞬間、瞬間に起こっています。表情でこの人の感情、情動の変化を読み取ることはできなくても、このようなサーモグラフィで読み取ると、この人が動揺していることがわかるのです。

次に、情動知能とは何か。そういう情動に関係する知能です。従来からアカデミック・インテリジェンスという学術的な知能が当たり前、それしかないと思われてきたのですが、それが、エール大学の先生のサロベイとメイヤーが、初めてエモーショナル・インテリジェンス、情動知能という言葉を使いました。何かを覚えたり、考えたりする知能だけではなくて、情動に関する知能というものがあることをこのサロベイとメイヤーが提唱したのです。そのエモーショナル・インテリジェンスという同じタイトルの本をゴールマンという人が出版しています。これは、日本で「EQ」という日本語訳をつけて、出版されベストセラーになっています。原著はエモーショナル・インテリジェンス、つまり情動知能というタイトルの本でした。それが「EQ」という日本語タイトル名で出版されて、ベストセラーになった。ただ、ゴールマンの「EQ」については、実証的なデータがない等、批判があったようです。しかし、サロベイとメイヤーや他の人たちが、研究を進め、情動知能という言葉は定着してきています。ゴールマンも、その後、EQを育むための教育支援の組織を立ち上げています。Social Emotional Learning (SEL) という名称で、今では世界的に広まり、重要な教育として認識されています。

もう一つは、ハーバード大学のハワード・ガードナーという先生がマルチプル・インテリジェンスという概念を提唱しています。多重知能と訳されています。アカデミック・インテリジェンスとして大きくひとくくりできるのではなくて、もっといろいろな独立したインテリジェンスがあるということを提唱したわけです。脳科学の発展にともなって、脳の機能が解明されてくるにつれて、独立したいくつかの知能があるという考え方が出てきました。ガードナーは言語的知能、論理数学的知能、音楽的知能、身体運動的知能、空間的知能、それから対人的知能、内省的知能の7つの知能を提唱し、その後に博物的知能を付け加えて、8つの知能を提唱しました(図2)。その中の対人的知能、内省的知能、これをエモーショナル・インテリジェンス、情動知能と呼んでいます。これがサロベイとメイヤーが言う、情動知能に当たります。学校教育でいうと、後の6つの知能は、教科として成り立っています。この対人的知能、

内省的知能という情動知能は、実は、教科としては成り立っていないくて、その他の家庭、社会、地域、学校の自由な時間でこのようなものを育んでいく、教科で育まれてなくても良いとされてきたのです。でも今の子どもたちの状態をみると、とても自然に育まれるとは思われないのです。そういったことから情動知能の育成の重要性が出てきていると思います。

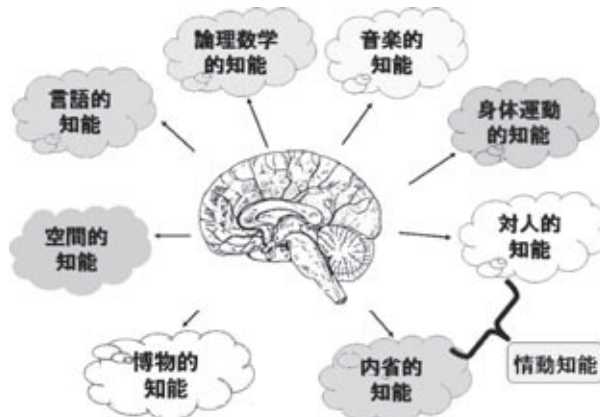


図2 ガードナーの多重知能理論と情動知能

サロベイとメイヤーのエモーショナル・インテリジェンスは、自分や他者の情動に気づいて評価、表出する能力、それから情動を利用して思考を向上させる能力、情動を理解し分析する能力、情動に関する知識を使う能力、それから、情動を調整する能力です。ゴールマンは、5つの能力を挙げています。サロベイらとの違いは、意欲です。ゴールマンは、エモーショナル・インテリジェンスの中に意欲も含めています。今、エモーショナル・インテリジェンス、情動知能とお話しましたが、実は、似たような言葉でエモーショナル・コンピテンスという言葉もあります。サーニたちは、小学校の段階で9つの情動能力、エモーショナル・コンピテンスが育まれるべきだということを提唱しています。この情動知能と情動コンピテンスですが、情動知能の方は、元々持っている素質も含めた能力を指していて、情動コンピテンスの方は、むしろ行動的な側面、活動の結果、得られるものという意味の違いがあります。非常に似た概念で情動知能が情動コンピテンスを含めたより大きな概念として捉えています。情動知能を明確に定義づけることは、中々難しいのですが、情動に関する能力と総称して情動知能という言葉を使っていきたいと考えています。

次に、なぜ、情動知能の育成が必要なのかということです。それは、最近の子どもの状況、子どもを取り巻く状況があまりにもひどいのではないかとということです。これは子どもの暴力行為の発生件数の変化を示しています(図3)。最近の子どもたちの暴力行為の発生件数が非常に増えています。

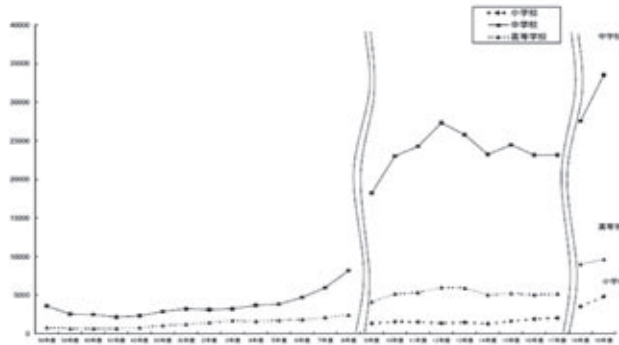
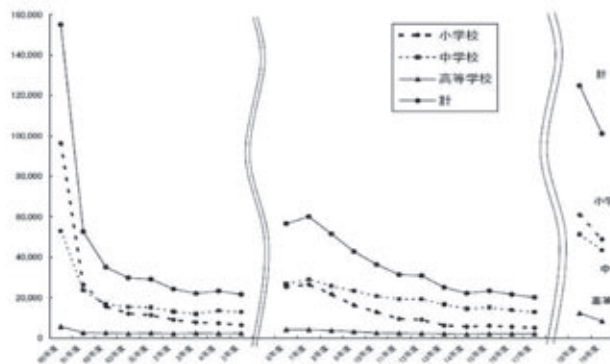


図3 児童・生徒による暴力行為の発生件数 (文科省, 2008)

いじめの発生件数ですが(図4)、年度によって集計の仕方が変わっているため、平成6年度からのデータで見ると、高校、中学校、小学校で多くなっています。少し下がる傾向は見られますが、でも依然として多い段階にあります。



* 平成17年度までは発生件数, 平成18年度からは認知件数。(文科省, 2008)

図4 いじめ発生・認知件数

それから、不登校の子ども数もずっと増えていて、下がっていないのです(図5)。そのような子どもたちの問題だけでなく、親の問題も多くなっています。

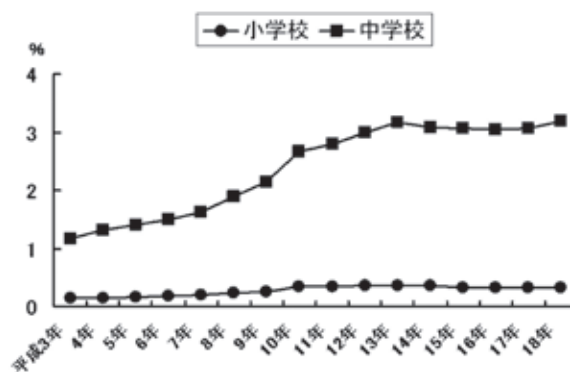


図5 不登校児童・生徒数 (文科省, 2007)

児童虐待の相談件数(図6)、検挙数を見ても増えています。そのような親の問題、子どもの問題が非常に深刻な状況になっている。それから、もう一つは、親の問題と子どもの問題が関連しているというデータが出てきています。これは国立教育政策研究所の調査研究ですが、全国の子どもの関わる機関からデータをとって、キレた子どもの原因を解明した研究があります。キレた子どもの成育歴に関する要因として家庭での不適切な養育態度が一番多くなっています。それから、家庭内の緊張状態が多くなっていて、家庭の問題が子どものキレる問題と関連していることが分かります。では、不適切な養育態度とは何か。厳しい過度な統制と養育不全、放任と過保護が上がってきています。

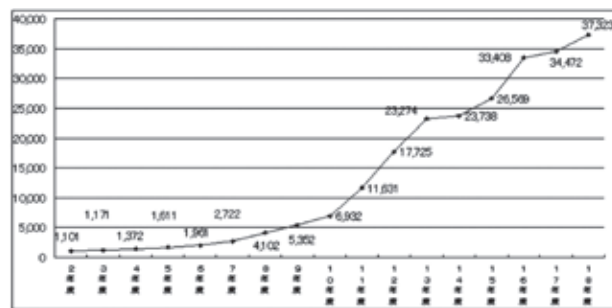


図6 児童虐待相談件数

(厚労省, 2007)

このように子どものいじめ、不登校、問題行動、少年犯罪、親の児童虐待、このような問題のかりのところが情動の問題と捉えることができます。相手の情動を正確に読み取ることができるのかという情動認知の問題、それから適切に表出できるのか、そして自分の中で情動を調整することができるのかという情動の問題があるということです。情動知能を育てていくということで、このような問題が解消されるであろうと考えるわけです。もう一つは、こういった問題を今、どのような形で対応しているのかというと、対症療法、問題が起きてからどうするのか。不登校になってからどうするのか。暴力行為が起きてからどうするのか。虐待をどうするのかという対症療法です。それでは、完全にこのような問題を防ぐことができない。それらの発生を未然に防ぐ必要があるということです。子どもさんが、将来、暴力行為を起こすかどうか分からない時から、すべての子どもに対して、予防的な教育が必要ではないかと考えています。それは、教育でしかできないのではないかと考えるわけです。そういったことから、情動知能の育成の必要性があるのです。教育というのは、もちろん学校教育だけではなく、家庭教育も社会教育もあります。

それから、情動知能は、他の能力とも関係しています。「情動知能が子どもを伸ばす」という本日のテーマですが、情動知能が育まれることによって、いろいろな能力が発揮されることが分かってきています。情動知能とパフォーマンスの関係について、いくつか報告が出てきています。情動知能で一番難しいのは、情動知能の測定ですが、大人に関しては、確立された検査法があります。大人の情動知能と仕事のパフォーマンスについての研究があります。これは、大人のデータで、同じレベルのよく似た状況の男性 200 人について調べた結果です。40 歳から 55 歳の工学部の大学院修士課程を出た人たちを対象に情動知能が高い人と低い人を比べてみると、例えば仕事のパフォーマンスの質とか努力の量とか処理

速度、仕事の質、信頼度、他者とうまくできる能力などのかなり多くのものに有意差、つまり意味のある違いが出てきているという結果が出ています。

一方、子どもの情動知能をきちんと測ることは難しいのですが、情動知能が高いと思われる子どもの特徴、情動知能の一部と学力、或いは、情動知能の一部とアメリカの大学受験時の統一試験成績との関係などが出てきています。ゴッドマンは、情動知能が高い子どもは友達と協調できるとか、行動上の問題が少なく、暴力的な行為に走りにくいとか、怒り、恐怖、悲嘆などのネガティブな情動よりもポジティブな情動が多いとか、成績が良いと報告しています。観察によるものです。それから、情動知能を獲得している子どもたちの特徴と獲得していない子どもの特徴。例えば獲得している子どもは、「私は何々です」という「I」（私）メッセージをするのに対して、情動知能を獲得していない場合は、すぐに相手のせいにして、誰が悪いからという言い方をする。学力との関係でも、エライエスが最近出している報告があります。日本では小学校から中学校に入ると意欲が極端に低下する中一ギャップが問題になっています。アメリカでも似たようなことが起こっていて、思春期に学力が低下するということが深刻な問題のようです。5年生と6年生の子どもたちに情動知能を高める教育を実施して、学力（GPA（Aをどれだけ取ったか）を指標）への効果を調べています。情動知能を高める学習時間数が最も少ない、中程度、最も多いという3つのグループを設定して、その効果を調べています。その結果、最も多く取り入れた場合は、学力の下がり方が緩やかになったことを示しました。ですから、情動知能を高める教育をすることによって、思春期に起こる学力の低下が少なくなったということです。

次のテーマとして、情動知能が育まれる時期はいつか。まず、情動知能の育成は、思春期までの教育が重要だということをゴールマンとかゴッドマンが言っています。その裏付けとして、脳の発達を見ると、まず、一番大きなピークは、乳児期、生まれてすぐの新生児期です。乳児期の脳の発達は、非常に著しい。特に最近言われているのは、7ヵ月、8ヵ月ぐらいの時に、シナプス（神経細胞と神経細胞の絡まり合い）が非常に増えて、それが必要なものだけ残されて、刈り込まれていくという仕組みです。シナプスの過形成と刈込み、たくさん神経細胞同士が絡まるのですが、必要のないものまで絡まってしまうので、それが刈り込まれて、適切な状態に落ちつくのです。これが乳児期に起きます。そして、この現象は思春期にもう一度起こることが最近の研究でわかってきました。ADHDは刈込みがあまり起こらないのではないかととも言われています。思春期の時期にも起こると言いましたが、乳児期とは発達する脳の部位が違って、情動のコントロールに関係している前頭葉のシナプスの過形成が、思春期頃に起こってくると言われています。視覚野とか運動野などは、非常に早くにシナプスの過形成と刈込みが起こっているけれども、前頭葉はゆっくり起こってくる。それから髄鞘化といって、脳を構成する神経細胞の神経の軸になるところに鞘ができてくるのです。生まれてすぐの赤ちゃんは、鞘ができていない神経細胞が多いのです。鞘ができてくると、早く情報を伝えることができるようになります。その鞘のでき方が、特に前頭葉では非常にゆっくりとできてくる、ゆっくり発達してくると言われています。そういう髄鞘化がずっと思春期までゆっくりゆっくり進むわけです。乳児期も大切ですが、思春期の頃も非常に大事であるということです。

では、赤ちゃんは情動の能力をどのように育んでいくのでしょうか。乳児が情動表出します。それに

対して、養育者は、敏感に感じ取るのです。敏感に感じ取って、それをまた養育者の表出方法で表出します。その時に、赤ちゃんが捉え易いような表出の仕方をします。赤ちゃんが情動を理解しやすいやり方で、お母さんが返すのです。これがとても重要で、赤ちゃんに対しては、誇張した言い方、或いは抑揚のある声で話しかけたりするというのは、赤ちゃんがその情動を受け取りやすいやり方なのです。それをエモーショナル・アベイラビリティ情動応答性と呼んでいます。お母さんの情動応答性と赤ちゃんの情動応答性をそれぞれが発揮して、お互いに情動を受け取りやすく、交流しやすいようなやり方で関わり合うのです。それらが関連し合って、特に乳児が情動に関する能力を高めていくということです。

とても大事なことは、赤ちゃんは不快な情動を自分で抑えることができないのです。できなくて泣くのですが、泣いた時に周りの人が、いかにその情動を抑えてあげるかということが大事なのです。それを繰り返してやっていく、その内、乳児は、心地良い情動の調整の仕方を学んでいくのです。そういうプロセスがとても大事です。それを毎日繰り返してしていく。しかし、そういうことを経験していない子どもがいます。虐待で放っておかれた子どもはそのような経験をしていないので、どうやって情動を抑えるかという、泣き疲れ、疲れてしまって、治まる。心地良い情動の治まり方ではないのです。つまり、歪んだ情動調整の仕方を学習するのです。情動を心地よく調整する調整の仕方というのを、周りの大人たちによって、教えてもらった子どもは、やがて自分の中で心地よい情動の調整の仕方を身につけていくようになる。そのプロセスがとても大事だろうと思っています。では、虐待を受けた子どもたちはどうなるかという、親に代わる保育士、幼稚園の先生、小学校の先生の役割が今まで以上に大事になっていると感じています。そのような、優しく情動を調整してもらい抑え方を学んでこなかった子どもたちに親の代わりとして、周りの人たちがどのようにそれを体験させてあげるのかが大事ではないかと思っています。時間が参りましたのでここで終了いたします。

一色：松村先生、どうもありがとうございました。最後の言葉が非常に印象に残る言葉で、心地よい情動の調整の仕方を学んでいく。それを小さい時に学んでいくことが大切で、それを学べない子どもにとっては親だけではなくて、保育をする人など周りの人が支援していかなければならないということで、総合子ども学科の、これから保育士、幼稚園教諭、小学校教諭になっていく学生にとっては、非常に大切なメッセージをいただいたと思います。それでは、今の松村先生のお話に対して、原田先生の方から小学校現場での教育者としての視点ということでお話をしていただきたいと思います。原田先生は、実際に芦屋市の小学校の校長先生を9年間勤められましたし、その前は小学校の教員ということで、ずっと長く教育現場に携わった方です。最近では、兵庫県教育委員会が毎月発行している「兵庫教育」で、子どもたちの悩みの相談をなさっているということです。では原田先生よろしくお願いします。

原田：私は、所謂学校現場、現場人として今日の松村先生のお話を受け止めて、今皆さんにどういうことをお伝えしたらいいのかということを考えてみました。そこで二つのことをお伝えしたいと思います。一つ目は、松村先生がおっしゃっておられる情動知能というものを高める、豊かにするためには、現場人としてどうしなければいけないのか。二つ目が、情動知能を育むために実は、私たちが、子どもたち

の教育の現場に行くわけですが、教育者として、どういったことを心得ていかなければいけないか。もっと言いますと、先生方自身が本当は一番豊かな情動知能の持ち主になっていただきたいと思うことです。

一つ目に情動知能を豊かにするために、皆さんが現場に行って、特に心掛けなければいけないのは、集団というものをどのように育てていくかということではないかと思います。私は「合いの教育」ということをいろいろなところでお話していますが、この合うという言葉について考えてみますと、子どもたちが小学校に入学し、1年生の子どもたちが教室に集まってくる。これも一つの合う、集合の場面であります。それからその子どもたちが相手のことを意識して、そして、関わりを持とうとし始める。そういう段階の合うもありますし、もっと高まっていくならば、お互いがお互いを刺激し合って、更に高まり合う、深め合う、認め合う、そういう場面の合うという段階もあります。これは、学級などの集団を指導していく中で、強く感じることです。そうした学級経営に対して、どのように関わっていくかということが情動知能を発達促進するためにも非常に大事ではないか、クラス作り、集団作り、これがまず、皆さんが現場に立った時にしなければいけないことではないかと思います。それと併せて、私は小学校の国語の指導を中心にして参りましたので、国語の面から申し上げますと、言葉というものの教育の大切さです。実は、関係というものを多くの場合、成長発達する中で言葉を通してお互いの関係を作り上げていく場面が多いです。ですから、言語、言葉をどのように子どもたちに育てていくかということが非常に大事であると思っています。一つの物語を前にした時にその登場人物の気持ちや心情をどのように読み取っていくか、解釈していくか、それをお互いに交流していくか、そのことによって、子どもたちは豊かな学びを経験していくことができます。また、話すこと聞くことを捉えてみても、本当に聞く場合でも、ただ単に聞こえているという状態から聞き取る状態、更に聞き分ける状態、もっと言うところ聞き比べる状態、自らの発言するために聞く、そのような主体的な聞く力といったものを育てていくことが実は、情動知能を育てていくことに繋がっていくのではないかと思います。

更に、話す場合にも、ただ自分の思いを一方向的に話すだけではなくて、集団の中で学習していくわけですから、他の子どもたち、他の仲間の話をどのように聞いていくか、そして聞いたことを元にして、付け加えたり、同じであることを明らかにしたり、違いを明確にしたり、更には、意見を聞いて自分の意見と比べてどうであるかということ話す。そして、二つの話を比較しながら繋がりをきちんと理解して話ができるといったような話し方にもいろいろなレベルがあるということを指導していく、これが、お互い関係性の理解の上で、非常に大事ではないかと思ったりしました。

次に、子どもたちを指導する私たち、教育する場の人間がこの情動知能をどのように発揮するかということが大事であることを申し上げたいと思います。先程、一色先生から話がありましたように、兵庫県教育委員会が発行しています「兵庫教育」という雑誌の中で、「原田先生の悩み相談の窓」という項を受け持っています。その中でいろいろな方、これは先生方の悩みを私が受け止めて、それに回答するという形を取っていますが、いろいろな悩みを聞くにつれ、本当に先生方の情動知能をもっと豊かにしなさい、そうでなければ、子どもとの関わりはいいものにはなりませんと思わざるを得ない部分がたくさんあります。今の先生は、すぐに子どもたちがキレたり、勝手な行動をしたり、落ち着きがなくてうろろしたりという姿を見ると、この子どもは軽度発達障害ではないかということで、そのようなこ

ろに解決を求めようとしがちであるけれども、もちろんそういう場合もありますが、私が経験したことを思い起こすと、多くの場合、子どもたちはそういう行動を通して、先生たちに訴えているのだ、僕のことをもっと分かって欲しいということを語りかけているということが分かって参ります。子どもたちを指導する立場の私たちとしては、子どものことを共感的に受け止める。まず、相手を全面的に受け入れる。そうした姿勢を持って、子どもと関わっていく。そういう姿勢を持つならば、子どもの理解の仕方また保護者に対する理解の仕方変わってきます。私たちが変わらなければ、子どもも保護者も変わることはありません。ですから、相手のことを理解しようとする。そうした姿勢で関わっていく、それが大事ではないか。これは、正に、先生方ご自身の情動知能ではないかと思ったりして、私は、松村先生のお話を伺いました。以上です。

一色： どうもありがとうございました。原田先生からは2点のご指摘をいただきました。松村先生は、兵庫教育大学の教授であると同時に、附属の小学校の校長先生を4年間勤められ、小学校の子どもたちの情動知能を育むという実践もされていらっしゃるということを伺っています。今の原田先生の教育現場からのお話を聞いて、どのようなことを考えられたか、それから、先生が4年間実践されてきた、情動知能の取り組みの中でどんなことがわかってきたか、その辺りを聞かせていただければと思います。

松村： 今の原田先生のお話を伺って、その通りだと思います。子どもたちの情動知能を育もうと思えば、育む側の情動知能も高くないと難しいと思います。今、聞く力と話す力とおっしゃいましたが、情動を読み取る時には、見る力と聞く力です。子どもの状態、表情をいかに見るかということが非常に重要だと思います。話す力も表出のところでは、どのようにこちらの思いを子どもや子どもの親に伝えるのか、そこの伝え方、そこには、言葉だけではなくて、声の調子、トーンも重要だと思います。声の調子を状況に応じて変えて、表出するという事です。学校の先生たちを横から観察していると、その辺りはとても上手です。ベテランの先生とベテランではない先生の情動について研究しております。子どもに対してベテランの先生は、真の怒りは感じていないのですが、ここで怒らないといけないという時に、怒りを表出するのです。演技者です。ここで怒らないといけないという時には、役者になって怒る。でもたまには腹立たしいことが起きたりします。その時には、子どもに対してストレートに怒りを出してはいけません。ところがそんなベテランの先生でも、若い頃は熱血教師で、子どもと同じ感情になるのが良いと感じていたので、子どもが喜んだら同じように喜び、子どもが憤慨していたら、同じように憤慨するとしていたそうです。でも、教師として段々と磨きがかかってくると、そこを演技するようになってきたという話を聞きました。そのように、教師は、エモーショナル・レイバーといって、情動に関わる職業人という言い方もできていると思います。原田先生の、現場での教育がとても大事であると言われるように、本当にそれぐらいの良い先生になって欲しいと思います。私も教員養成の大学におりますので、若い人たちを、いかに良い先生に育てるか、算数、国語などを教える以外に子どもを心の底から理解できる、受容できる先生を育てたいと思います。そのような子どもの状況、子どもの気持ちが分かる教育がもっと要るのではないかと思います。

それから、もう一点、一色先生からご紹介がありましたように、附属小学校で研究開発学校の指定を6年間文部科学省から受けて、人間発達科という教科を立ち上げていました。そのことについては、今日、資料をお配りしておりますので、後で読んでいただけたらと思います。内省的能力と対人関係能力という情動知能を育む取り組みをしてまいりました。小学校は1年生から6年生まで、年齢の違う子どもがいます。1年生は、本当に幼い幼児期から出たばかりで、6年生は中学前の子どもですから、年齢がとても違うのです。その年齢の違う子どもたち同士の交流というのが、毎日のようにできます。入ってきた1年生を上の学年の子どもが養護する、大切に関わってあげるという活動をずっとやってきました。大切にされた経験はとても大事です。その大切にされた経験を持った子どもたちが1年生から順番に大きくなって、6年生になった時には、適切に1年生に関わってくれることができます。もう1サイクル終わっていますので、うちの小学校はとても良い状況です。4月の新学期になってすぐ、仲よし遠足といって、1年生と6年生、2年生と4年生、3年生と5年生と2つの学年が一緒に出かけます。1年生は、6年生と一緒に王子動物園に出かけます。着いたら、記念撮影をして、6年生と1年生の5、6人で1つのグループを作って解散します。グループで一緒に行動します。どこで、何時にお弁当を食べてもいいし、どこに行ってもいいのです。6年生が責任を持って1年生と一緒に行動することになっています。決まった時間に必ずここに帰ってくる。その日だけは、6年生は、グループで一人だけ時計を持ってきてもいいということにしています。わがままな1年生に対して、どこに行きたいかとしゃがみこんで聞いてあげたり、1年生の歩幅に合わせて歩いてあげたり、6年生はそういうことを本当にうまく、一生懸命やってくれます。それは、自分たちが1年生の時にやってもらった経験があるから、どう対応していいのかが分かるのです。そういう優しくしてもらったという体験は非常に重要であろうと思います。そのような教育を6年間やってきて、良い成果が出てきたと思っています。

一色：松村先生のお話に対して、原田先生、何かございますか。

原田：今のお話を伺いながら思いましたのは、学校の先生、幼稚園の先生、保育士の場合でも共通すると思うのですが、子どもたちを指導する場面で、いくつかの役割を果たさなければいけないということを今一度思い起こしました。一つ目は、先生が見とるということの大切さをお話されましたが、これは、医者としての働きであると思います。教師というのは、ある面では医者として、子どもたちの健康状態とか精神的、心理的な状態をしっかりと見とる力が必要とされるのではないかと思います。それから、二つ目は、先生が何度か詳しくお話していただきましたが、正に、役者としての教師の力、これは、本当に大事です。私もやはりおっしゃっていた通り、新卒4、5年目までは熱すぎた先生の一人でした。熱すぎたために思わず知らず、手足の出ることもあったと今から思うと反省しきりですが、でも、その熱すぎた時期を体験することによって、徐々に子どもの見方をもっと冷静に見ることができる。そうすると今度は自分自身が、怒っているふりをすることができる。また、いきなり怒った表情をしても、サッとニコリとした表情に切り替えることができるというふうなことが段々とできるようになってきました。ある時には、子どもたちのお父さん、お母さん役にもならないといけないし、社会人の役割も果たさないとはい

ないし、いろいろな場面、状況に応じて子どもたちへの役者としての働きを成してきたと思います。また、教師に求められるのは、易者としての働きではないかと思います。この子どもは、将来どういう方向に伸びていくのか、この子どもはどういう可能性があるのか。本当に一人ひとりを一生懸命見つめて、「みんなちがって、みんないい」けれども、その中の一人ひとりに何かこの子の光るものを見つけよう、そうした前向きなこちらの姿勢によって、子どもたちとの関係もどんどん変わっていきます。いいところを一生懸命見つけるというこちらの姿勢は、子どもたちにとっては、非常に心地よいものです。ですから、そういう易者としての働きも必要である。そして、最後に何よりも求められるのは、研究者、これは本当に授業をしようと思ったら、また、保育をしようと思っているのであれば、研究的態度だけは絶対に失ってはいけない。もっといい方法がないか、もっとこの課題を解決するにはどうすればいいのか、もっと本を読もう、もっと勉強しよう、もっと求めよう、先輩に聞いてみよう。そういう気持ちがある限り、その先生は、伸び続けるのではないか。そして、子どもたちとの関係も良くなり、そのことが子どもたちの情動知能を豊かにしていくことに繋がるのではないかと思います。

一色：とても上手くまとめていただきました。私から原田先生を見てみると、昔は熱すぎた先生とおっしゃっていましたが、今でも十分に熱い先生だと思います。学生たちに対しても熱く指導されていると思います。

原田先生の最初のお話の中で、言葉という教育の大切さのお話をされました。松村先生も情動知能が有る無しというところで、情動知能がある子どもは、私がと自分を主語にして、私は何々～ところが情動知能が育っていない子どもは、誰々が何々～とこれは言葉の問題と密接に関わっているように感じましたが、その辺りはいかがですか。

松村：これは、率直に話せるかどうかだと思います。自分が、どう感じているのかを率直に話すことができるというのがとても大事であると思います。そのためには、クラスの中が安全な環境であることが大切です。誰かがどんなことを言っても、誰もからかわないし、馬鹿にしたりしないというクラス的环境づくりが、一番重要で、そういった中であれば、子どもたちは、いろいろなことを率直に話すと思います。

一色：もう一つ伺いますが、乳児期が非常に大事で、児童期にも情動知能が更に育まれていくという話を伺いましたが、一つ抜けているのが、乳児期の次の幼児期、この幼児期はどのようにして情動知能を育んでいくのか、また育んでいけるのかを伺いたいです。

松村：幼児期は、乳児期の続きです。自分の情動を自分で調節できるようになりつつあるのですが、それをサポートする家族が重要かと思います。ただ、家族だけではなくて、幼稚園、保育所の先生たちとの関係や、周りの同じ年齢の子どもたちとの関わりで、いろいろな感情を経験していくということも大切です。自分の中で少しずつ調節していける時期だと思います。何度も言いますが、周りの人たちが「よしよし」としてあげる、サポートしてあげることもまだ必要な時期だと思います。

一色：では、学生の方で何か質問、ご意見などがありますでしょうか。

学生A：最近、日経キッズという雑誌や他の文献などで、自分の感情がわからない子どもたちが増えてきているとか、自閉症の疑いがある子どもが増えているなどを書いてあるのですが、それは、情動の問題と関係があるのではと思ったのですが、それについていかがでしょうか。

松村：子どもは心の中で違和感を感じても、これがどのような情動なのか初めはわからないのです。それで、お母さんが「痛いね」と言葉に置き換えてあげて、それが痛いとか悲しいとか、楽しいなど情動に関係する言葉を覚えていくのです。そういう経験がない子どもは、これは何の情動なのかわからないということも起こるかもしれません。ですから、家族との関わりが少なく、感情、情動についてのコミュニケーションがなかった場合、そのようなことが考えられると思います。最近はそのようなことが多くなっているのかも知れません。虐待を受けて大きくなった人は、情動の表出が非常に少ないと言われています。虐待を受けて大人になって親になったお母さんを考えると、感情をどう表出して良いかわからない、情動語も一般の人よりも少ないということが考えられるかと思います。そこは、保育園や幼稚園、学校の先生の役割が今まで以上に重要になってきていると思います。だから、先生たちが「楽しいね」とか「怖かったね」と抑揚をつけた言葉で情動語を発してあげることが大事ではないかと思います。

一色：これは、今増えてきているのですか。

松村：データとしては、見ていませんが、可能性としてはあるかとは思います。

一色：他にいますか。

学生B：心理学科4年生の者です。先程、情動知能を高める教育をすることで、思春期における学力低下を防げるということを伺いましたが、情動知能を高める教育をすることで、不登校児童の数が減ったり、学校適応度が高まったりするという事例は、実際にありますか。

松村：データとしては、見たことはありませんが、それはあり得ると思います。子どもたちが安全な場所だと感じて、情動知能が高まると相手との関係が取りやすくなります。そうすると、不適応がなくなるわけですから、当然、不登校もなくなることがあり得ると思います。

学生B：ありがとうございます。もう一つ質問があります。情動知能と仕事のパフォーマンスのところで、検査法が実際にあるとおっしゃっていましたが、どのようなものですか。

松村：大人の調査用紙は、開発されていて、いくつかあります。日本語訳にされたものもでています。

EQジャパンという会社が出しているようです。

学生B：これは、情動知能を測る尺度ですか。

松村：情動知能の尺度として出されているようです。ただ、それは、大人版です。サロベイたちも子ども用のものをまだ完成していないと思います。

【休憩】

一色：第二部を始めたいと思います。最初に松村先生に質問があります。情動知能は学業面での学習効果を高めるというお話をされていましたが、これには、エビデンスベースで資料がありますというお話でしたが、世の中一般のお父さん、お母さんからすると、自分の子どもの学力のことで併せて、情動知能も考えていきたいと思っていますので、その辺りについて、お話を教えていただけますか。

松村：情動知能と学力の関係で、データがあると申し上げましたが、実は、そんなにはないのです。お配りしたプリントの中に、情動知能とアメリカの大学入試時の統一試験の成績との関連性について書いています。情動知能が高い子どもさんほど、統一試験の成績が良かったという報告です。それは、情動知能の一つとして、情動を抑制することができる能力、遅延満足の能力を測っています。大人が子どもの目の前にマシュマロを置いて、「食べてはだめよ、後でね」と言って、出て行く。そのマシュマロを目の前にして、子どもがどれだけ待つことができるか、その欲求をどれだけ抑えることができるのかという時間を測っているのです。その幼児期の我慢できる能力と大学への入学時のテストの成績に相関があった。つまり、情動を抑制する能力が高い子どもほど、入学時の試験の点数が高かったということです。

一色：ありがとうございました。では、会場にお越しの方で、コメント、ご質問はございますでしょうか。

一般A：教育関係の出版社に勤めている者です。今日はどうもありがとうございました。最初にコメントさせていただきます。私は、仕事で私立の進学校に取材に行くのですが、最近、教科だけを教えているのでは駄目だと先生方がおっしゃっていて、行事をたくさん取り入れたりして、そのようにしないと大学に入ってから、のりしろがないとおっしゃっていたので、今日の先生のお話と合致すると思いました。

質問ですが、今情動教育が必要ということで、少年犯罪や不登校が増えているという現状をおっしゃっていましたが、そのようなことが少なかった時は、情動教育の状況というのは、今と比べてどう違っていたのでしょうか。

松村：その当時は、情動知能という言葉もなかったし、データもなかったので、推測しかないのですが。少なくとも今よりは、子どもがいろいろな人と関わる状況があったのではないかと思います。人といろいろな関わることによって情動知能が育まれることがあったと思います。小さい子ども同士二人を遊ばせようとしても、関係が中々できないのですが、そこに、一人大人が入ると、うまく橋渡しをして、二人の子どもが遊ぶことができるようになる。それは、足場かけ、スカフホルディングという言い方をするのですが、その橋渡しをする人がいるわけです。そういう状況が昔はあったのではないかと思います。近所にお兄ちゃん、お姉ちゃんがいて、うまく小さい子どもも含めて、遊べるように足場をかけるような人がいたのではないかと思います。ですから、今のような人間関係に関する問題がそれほど深刻ではなかったのではないかと思います。

一般 A：地域のコミュニティがなくなったことが今のような状態になったということですか。

松村：そうです。そのように思います。コミュニティの問題と兄弟の数が減少してきていることもあると思います。

一色：他にどなたかいらっしゃいますか。

一般 B：長らく障害児教育に携わっておりました。松村先生は、お医者さんだと思うのですが、お医者さんだと子どもを見ると、これは、健常な子どもだ、これは障害を持っている子どもだという分け方を、まず、お医者さんはするのではないかと思いますのです。

松村：私は、基礎医学を勉強してきていて、臨床医ではないです。

一般 B：情動知能という言葉は初めて伺ったのですが、障害児教育に携わっておりましたから、いろいろな子どもに接して、情緒障害というのは、馴染みがあるのですが、それと関連しまして、高機能自閉症の方などは、大学に進学されている方がいますが、そのような高機能自閉症の方が大学に進んでいる中で、このような情動知能は、それなりに獲得したのか、情動知能の方では、欠陥があるけれども、学力面でついてきたので大学に進学できたのか、その辺りのところはどうお考えでしょうか。

松村：まず、情動知能を初めて聞かれたということでしたが、情緒とか情緒障害だと馴染みがあるということですね。情緒と情動は全く同じ言葉です。一般に情緒の方が皆さんは馴染み易いかと思います。研究者の間では、情緒という言葉は、あまり使わなくて、情動という言葉を使っています。今、私の方が、情動という言葉でお話したのは、情緒と置き換えて理解していただいても同じです。私の大学の夜間の院生に、ある有名な進学校の養護教諭をしている人がいるのですが、そこも随分アスペルガーの子どもが多く、その子どもたちがかなりの数、有名大学に進学していると話していました。その中には、

対人関係がうまくとれる子どもが少ないという話を聞いています。ですから、日本の場合は、学力が高ければ、有名大学に進学できることは可能だと思います。しかしその場合、対人関係が良いとは限らないと思います。アメリカでは、情動知能を高めるための熱心な学校があります。2年前に訪問した学校が、非常にレベルの高い英才教育をしていました。そこは、英才教育と共に、情動知能を高めるためのソーシャル・エモーショナル・ラーニング、先ほどお話ししたゴールマンが設立したSELですね。それをやっています。SELは世界的に広まりつつある情動知能を高めるための教育です。それを古くからやっている学校なのです。そこでは、学習の仕方がちょっと違っていて、子どもたち同士が共同でいろいろなことをするという学習の形態を多くとっています。ですから、日本では、アスペルガーの子どもに対しては対人関係能力を高める教育は特にやっていないようです。高機能自閉症の子どもは、ある型にはめてあげたら、一生懸命勉強します。むしろ、本当にそこまでがんばらなくて良いよとこちらが止めるぐらいはまり込んでしまいます。その結果として学力が向上します。一方、アメリカのヌエバスクールという学校ですが、そこは、個別学習だけではなくて、共同で調べたりする学習を多く取り入れて、学力だけではなくて、情動知能も高めるための教育をやっています。むしろ、そういう教育を重視しています。そして、その子どもに応じて、自閉症の子どもであっても、この子はこういう能力があるというところを引き上げるように、放課後に個別教育をしています。教育の仕方は、先生だけがするのではなくて、保護者の中で、ピアノの先生をしている方とか大学の数学の先生などがいらっしゃったら、1週間に1回、2週間に1回来て、特別に能力がありそうな子どもを1人、2人相手に、放課後教えています。

原田：先程、先生方の悩み相談に関わっているという話をしましたが、実は、このような形で悩みがきます。「小学校1年生の担任をしている初任者です。担任をしている児童の中に授業中落ち着きがなく、注意をすると従わないばかりか、反動的な態度をとったりする子どもがいるので、もしかして発達障害があるのではと考え、先輩の先生方に話すと、逆にあなたの指導に問題があるのではないかと言われました」ということで、後、学校に行くのがつらくなったと書いているのですが、要するに今、ちょっとはみ出したり、落ち着きがなかったり、勝手な行動をしたり、情動知能が未熟な子どもが、即、発達障害、軽度発達障害だという枠組みを、先生方がはめ込もうとしているのではないかと思ったりするのです。そうすることによって、ご自身が安心しようと、厳しい言い方かもしれませんが、そのような気がしたりします。私が若い頃の教育には、軽度発達障害という言葉はありませんでしたので、落ち着きのない子どもはその内、学年が進むにつれて、落ち着いてくるだろうという気持ちで長い目で、6年間というスパンで子どもを見ていこう。その時々ではみ出して出ていくような子どもも時間になったら戻ってくるということで教育をしてきたような気がします。今の先生方はある意味では、生真面目過ぎるところがあって、すぐに軽度発達障害ではないか、そのためには、専門機関に相談したら良いのではないか、保護者にどのようにして、専門機関に相談するように向けていったらいいのかという形に向かっているのではないかと思います。

一色：ありがとうございました。私の方から伺います。松村先生が、情動知能を高める教育ということで、

共同でいろいろなことをする形態をとっている学校があるというご紹介をしていただきました。それから、松村先生の附属の小学校でも実際に1年生と6年生、2年生と4年生、3年生5年生と年齢の違う子どもたち同士が一緒になって何かをするというお話も伺いましたが、今日の日本の学校教育ですと、基本的には、異年齢の子どもたちが一緒になって学ぶ場が非常に少ないです。それから共同で行うということによって、同年齢の中で共同でやった総合的な学習が減って、学力を高めるための国語、算数、理科などが増えてきたわけです。そういった大きな学校教育の流れの中で、情動教育を高めるということが中々難しい状況になってきているのではないかと思います、その辺りはいかがでしょうか。

松村：学力重視ということですが、学力と情動知能を育む教育というのは、対立しているものではなくて、どちらも並行してやれるものだと思います。例えば、私どもの附属小学校で、不登校気味だった子どもがいます。その子どもが6年生になって、下の1年生をリードする立場に立って、一日も休まずに通学することができるようになったということがあります。それは、下の学年の子どもたちとの関わり、関係というものがあって、6年生になったらリーダーとして下の学年を引っ張っていくという役割があることを子どもたちは皆、知っているのです。特にこの不登校気味だった子どもさんの場合も、4年生、5年生の頃は、学校に来てよく保健室で寝ていたのですが、6年生になって、自分が学校に行かないと困る下級生がいると自覚することで、励みになり、学校に出て来れるようになったと思われます。そこには下級生から頼られる心地よさも生じていたと思います。直接学力が上がるわけではないのですが、学校が楽しい場所であるということは、長い目で見ると、子どもの学力上昇につながるのではないかと思います。

それから、算数に躓きがある子どもを集めて、大学生に放課後マンツーマンでついてもらって、躓きをサポートするような取り組みもしたことがあります。興味深かったのは、大学生との関係がうまく取れる子どもでは、学習効果がはっきりと出てきました。分からないことをここが分からないと率直に聞くことができるので、しっかりと教えてもらえて、分からないところを克服することができた6年生の例もあります。やはり、情動知能が低い子どもよりは高い子どもの方が学力も伸びる可能性が大きいと思います。

一色：原田先生、いかがでしょうか。

原田：学力問題が、本当に出てきたのは、今の学習指導要領に変わる前です。経済協力開発機構（OECD）による学習到達度調査が行われて、日本の子どもたちの国語の読み取り能力がどんどん落ちてきて、平均的になってしまったということから、学力低下、その予先がゆとり教育に問題があるということで、一時マスコミを中心に大騒ぎになりました。そのような中で、今の日本の子どもたちに欠けているのは、PISA型の読解力と言われていますが、要するに論理的な思考力、そのようなものを駆使して読み取っていくような、そのような力が欠けていたのではないかとということが強く言われました。私自身は、そうした論理的思考力というのは、情動知能が安定している子どもは、論理的思考力も安定

している。これは、研究的にきちんとデータを出したわけではないのですが、経験的に、そのようなことを思ったりしております。ですから、情動知能を高めることと、学力を高めることは決して別に考える必要はないのではないかと思います。

また、別の話になりますが、私は、国語概論という講義をしています。その中で、学生に表現力を高めるためにいろいろと書かせるのですが、その学生たちに私は、保育士なり、幼稚園の先生なり、小学校の先生になってもらいたい。そのためには、情動知能を高めてほしいという願いがあって、その書かせる中身をできるだけ、関係能力を高めるようなことを書かせようとしています。例えば、家族に葉書を書く。改まった気持ちで書くとなると、表現を考え、その時にご両親の姿を思い浮かべながら、書いていって、そして、それが家に届き、そこからまた家族の話も生まれてくるということを試みたり、他には、「甲南一郎さん」という架空の人物を創り上げて、その人から交際をしたいという告白の手紙をもらった、それに対する返事をするという状況を作り、学生は学生なりにその一郎さんと自分との関係を想定して、返事を書くのです。申し出を受ける学生もいるし、断るけれどもいつまでも友達でいてくださいという学生もいます。いずれにしてもそのような活動を通して、学生にいろいろな状況に応じた対応ができるような経験を積ませていきたいと思って講義をしています。

一色：他にご質問などございますか。

一般C：先程、情動知能を測定する方法として遅延満足というマシュマロを使ったものを伺いましたが、他に何かありますか。

松村：遅延満足というのは、実験的に数量化しやすいのです。何分待っていただけるかということで、実験の課題によく使われています。情動知能全体を測るというよりは、その情動知能に関連するような能力を測定するという方法はいくつかあります。写真を見て表情を読み取ったり、文章を読んで、その情動を当てたり、言ったりなどというような方法もあります。

一般C：他、情動知能の教育が思春期までが有効であるということでしたが、それは何か証明されていますか。

松村：先程、少し出しましたが、情動をコントロールしたりするのに関係している脳の前頭葉、それは、怒りをコントロールしたり、情動を調整したりするのに役立っている場所ですが、その脳の発達が、他の脳の場所よりは、ゆっくりと発達してくるということが分かってきています。他の脳の部位はもっと早く発達します。そんなにゆっくり発達してくると困るのです。例えば、熱く焼けている鉄板に、手で触って、熱いというのを感じてすぐに手を離すことができなかつたら、火傷してしまいます。そのような運動系とか感覚系、視覚、聴覚など人間の生命に関係するようなところは、非常に早く発達するのですが、前頭葉そのものは、生命に直接関わる場所ではないので、ゆっくり発達してくるのです。理にかなっていると思

います。

一般C：あと一つお尋ねします。アメリカでは、社会情動学習があるということですが、それも共同で学習する形態とありましたが、これを通して、実際に情動知能が上がったという事例はありますか。

松村：今日お話した中で、アメリカの5年生と6年生で、SELを非常に少ない時間実施したグループと中程度実施したグループと非常に多く実施した3つのグループで、学力を比べた研究がありました。SELの学習時間が一番少なかったグループでは学力の落ち込みが大きかったけれども、SELの時間が最も多かったグループではその低下が最も緩やかになったという結果がでています。

一般D：今日は貴重なお話ありがとうございました。まず、感想ですが、情動知能の育成が必要ということで、教育現場にいらっしゃる先生方が発達障害があるのではないかと考えて自分の中で安心しようという考え方になってしまうという傾向はあると思うのですが、その学習障害になってしまうと知能検査などで、一点でも違ったら、その子どもが受けられる教育が随分と変わってくるので、先生方には、ちゃんとした意識と誤った判断はして欲しくないということと、それによって、子どもの将来も変わってくるので、その辺りはちゃんとして欲しいと思いました。原田先生は、適応力を身につけるために、大学生に先程の講義をされていて、松村先生は、大学生と算数の苦手な学生をマンツーマンで勉強させたということで、このプリントを見たら、附属小学校ですが、他の小学校となると、この取り組みがどうなのだろうということがあって、日本だから、浸透の仕方は、微妙なのかと思いますが、その辺りの現状はどうですか。

松村：良いご指摘をいただいたと思います。実は、私どもの附属小学校は、日本で唯一というぐらい特殊な附属小学校です。地理的にもとても不便なところにありますので定員割れをしています。そういう学校ですので、兵庫県に住んでおられたら誰でも入れます。転校生も年間10名から20名程います。データから言っても、ひとり親の数も一般の学校と変わりません。就学援助を受けている家族数も多分、公立と変わらないと思います。ですから、かなり公立に近い、他の附属小学校とは違う小学校だと思っています。そういう学校ですが、子どもが良く育っていると思っています。

一色：他にどなたかいらっしゃいますか。

一般E：先程、質問された方が、附属小学校の例を挙げておっしゃいましたが、他の小学校の取り組み例をお聞かせ願いますか。

松村：他の状況は分からないのですが、今年度から公立小学校の先生たちとも一緒に仕事を始めて、全部が無理としても、部分的にどの程度のことができるのかというのを検証しようと考えています。

一般 E: 情動知能に関してですが、今日、初めてそのような言葉を聞いたのですが、一人っ子の場合と、兄弟がいる場合によって、情動知能の発達も違ってくるのでしょうか。

松村: それは、当然違うと思います。ご家庭の中で、全くの一人っ子で関わりが非常に少ない場合と、たくさん兄弟がいて、それぞれが関わり合うのは違うと思います。ただ、一人っ子が駄目なのかというと、決してそうではなくて、一人の場合は、子ども同士の関わりは少ないかもしれませんが、お母さんとかお父さんなど親とのコミュニケーションは多くなると思います。だから、これでないといけないというのではなくて、個々の状況でいかに育てていくかということだと思います。

一色: どうもありがとうございました。本日は、「情動知能が子どもを伸ばす」というテーマで、いろいろなことを考えてきました。今、原田先生の1年ゼミの学生も参加していますが、子ども同士の関係と共に、先程、松村先生が一人の大人、足場かけ、一人の大人が介在することによって、それがより育まれていくということで、総合子ども学科の学生が目指している保育士・幼稚園教諭、その辺りの役割も非常に重要であると思いました。乳児期の情動応答性から始まって、幼児期から児童期、原田先生からもたくさんコメントをいただきました。今の社会は、黙っていても情動知能が育つということとは違うと思いますので、家庭、学校、地域、そういった社会全体で、具体的にそのような取り組みをしていかなければいけないと感じました。

では、本日の講演会は、これで終わります。